本間玄調について

荒井保男

本間玄調は幕末、水戸藩の生んだ名医で、漢蘭折衷派に属し、華岡青洲外科の大成者と称せられ、わが国最初の脱疽下肢切断術施行者として、また野兎病最初の記載者として名高い。

今回、私は水戸市、小川町を尋ね、名医・玄調は一地方都市に忽然として現われたのではなくて、彼を育てるべき大きな土壌が存在していたのを知った。それは①優れた家系、②稽医館の存在、③水戸藩医学の隆盛、④その推進者たる藩主、徳川斉昭公の寵愛がそれである。

㈠ 優れた家系と稽医館

初代は道悦といい、島原の乱の際鎮圧軍の一員として戦場に赴いたが、負傷して障害を持つ身となり武士を断念、医学を学び、本間家の宗祖となった。江戸に出て、次いで常陸の水郷、潮来に移り「自準亭」を開き、代々医業とした。四代目道意は更に潮来より小川村へと移り住んだ。五代目玄琢は歴代の医師のなかでも特に優れた逸材で、水戸藩に医学研究所の創立を願い出て許され、六代藩主の命名による「稽医館」を創設した。稽医館は藩当局の指示を受けて西洋医学を研究するなど、当時の地方には珍しい医学研究所として発展していった。玄琢は稽医館創設などの功績により藩医に列せられた。玄調の実父、玄有もまた稽医館の運営発表に尽くした功労者で、七代目の道偉もまた稽医館の研究体制の中心人物となり庶民救済としての活躍はめざましく、郡宰小宮山風軒の推薦で十人組上座表医師に抜擢された。八代目が玄調で、若くして「家学」を学ぶなど医師として立つのに十分な環境が備っていたのである。

㈡ 徳川斉昭と玄調

斉昭は光圀、原南陽以来の水戸医学を更に進展させ、医療と厚生に力を注いだ人物である。彼は教育改革を行い、一大藩校弘道館を設立したが、ここに文館、武館とならんで医学館を併設、居学、講習の二寮が置かれ、本草、蘭学、調剤、製薬の諸局と療養所、養牛場、薬園などが設けられていた。当時に於ける最高の「医学の府」のひとつということができよう。

玄調は後、召されて昭斉の侍医として、医学館教授として活躍するのであるが、かかる藩主に寵愛されたことは、玄調を大きく成長させてゆく上で、多大な力となったことは想像に難くない。

（平成九年九月例会）